

りょうふうきつさつ

## 涼風颯々 夏のやきもの

2018年7月6日(金)ー7月18日(水)、7月31日(火)ー9月1日(土)

世界を魅了するやきものは、土と火、そして人びとの技によって脈々と育まれてきました。本展では、江戸時代の陶工永楽保全(1795-1854)の作品をはじめとする陶磁器の数々を紹介いたします。清々しいそよ風の吹き抜けるような、涼やかな作品の世界をお楽しみください。



《染付 蜂籠文高足杯》永楽保全  
江戸時代末期・19世紀  
本館蔵(田万コレクション)

## 古代イタリアの息吹 —エトルスク美術—

2018年7月6日(金)ー7月18日(水)、7月31日(火)ー9月1日(土)

エトルスク美術とは、イタリア中部のエトルリア(現在のトスカーナ地方)を中心とした、古代民族エトルリア人の美術活動や作品のことです。彼らは前10-前8世紀に12の都市国家を作り、ローマ人に征服されるまでの数世紀に亘り勢力をほこつたとされています。古代に想いを馳せながら、生活を豊かに彩った作品をご鑑賞ください。

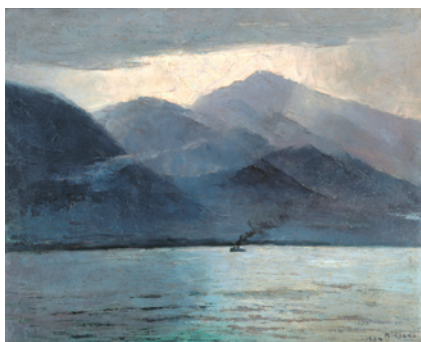


《テラコッタ 男子頭部》紀元前3-2世紀  
本館蔵(イタリア国立ピゴリーニ先史民族博物館寄贈)

## 赤松麟作

2018年7月6日(金)ー7月18日(水)、7月31日(火)ー9月1日(土)

赤松麟作(1878-1953)は岡山県津山市出身の洋画家です。東京美術学校西洋画科を卒業後は中学校の美術教師を経て大阪朝日新聞社の挿絵画家として活躍し、文展での評価を確立するとともに、画塾で優秀な弟子を多数育成するなど、大阪洋画壇の発展に指導的役割を果たしました。近年、新たに寄贈を受けた関係資料をまじえてその画業をご紹介します。



《雨後(芦ノ湖)》赤松麟作  
昭和9年(1934)  
本館蔵(玉井濱子氏寄贈)

## BIOMBO! —金と墨—

2018年7月31日(火)ー9月1日(土)

BIOMBO(ピオンボ)とは、ポルトガル語やスペイン語で「びょうぶ」(屏風)を意味します。日本の屏風絵が南蛮貿易を通じてはるか異国にもたらされ愛好された名残りをあらかず言葉です。屏風絵の魅力を演出する「金と墨」を対比しながら館蔵・寄託の優品をご紹介します。



《鳥巢図》長谷川等伯  
江戸時代・慶長12年(1607) 本館蔵

## 動物を描く —近世・近代の日本絵画—

2018年7月31日(火)ー9月1日(土)



《唐犬(右扇)》橋本関雪  
昭和11年(1936) 本館蔵

身近な動物に対する親しみや珍しいものへの憧れなど、古くから動物は絵画の対象となってきました。本展示では、所蔵・寄託の作品から、近世・近代の画家たちが描いた動物たちをご紹介します。夏のひととき、美術館でその愛らしい姿をお楽しみください。

## 日本・中国の仏教彫刻

2018年7月31日(火)ー9月1日(土)

中国南北朝時代から明時代にいたる1000年間の仏教彫刻、そして平安、鎌倉時代を中心とする日本の仏教彫刻を一堂に展示します。制作された地域や時代により移り変わる、「ほとけのすがた」をぜひご覧ください。



左:《石造 菩薩五尊像龕》  
中国南北朝時代・北周  
保定5年(565)  
本館蔵(山口コレクション)  
右:重要文化財  
《木造 四天王立像[持国天]》  
平安時代・12世紀  
大阪・大門寺